

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

# 南新居西遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991・3

長坂町教育委員会  
峠北土地改良事務所



北側上空より  
上



上空より全景  
上



遺跡北半分



遺跡南半分

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

# 南新居西遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991・3

長坂町教育委員会  
峠北土地改良事務所

## 序 文

リニアモーターカー新実験線の建設も決まり今、山梨は21世紀へむかって新しい時代を迎えようとしています。

しかし、新しい時代を迎えるということはふるいものを捨ててしまうということと同義語ではありません。この様な時代であるからこそ伝統的な文化遺産を保護し、また文化や藝術を守り育成しなければなりません。

本町における県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も今回で8回目となりました。本年は第IV工区南新居地区において調査を行い平安時代の集落を検出いたしました。八ヶ岳南麓の古代集落は9世紀・10世紀を中心に栄え、その遺跡数は膨大なものであり、当時の繁栄の様子を今に伝えてています。その繁栄の原因は何であったのか、またその前後の時代の衰退はなぜだったのか、また三官牧との関連はどのようなものであったのか、謎と興味はつきません。

本書は本年度の調査の内容を明らかにするもので、郷上の歴史の謎を解明する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業までご指導とご理解ご協力を賜りました山梨県教育庁文化課及び地元の皆様に深く感謝を申し上げます。

1991年3月

長坂町教育委員会

教育長 平井美隆

## 例　　言

1. 本書は県営圃場整備事業の事前調査として長坂町教育委員会が実施した北巨摩郡長坂町大八田3100外に所在する南新居西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は候北土地改良事務所との負担協定により文化庁・山梨県より補助金・負担金を受けて実施した。
3. 本報告書の執筆・編集は調査担当者である櫻井真貴が行った。
4. 発掘調査から本書の作成にわたるまで次の方々から貴重なご教示を賜った。記して感謝する次第である。  
坂本美夫　長沢宏昌　新津健　山本茂樹　浅利司　保坂和博　今福利恵　山路恭之助  
深沢裕三　山下孝司　雨宮正樹　佐野勝廣

(順不同、敬称略)

### 5. 調査組織

調査主体　長坂町教育委員会  
調査担当　櫻井真貴

### 6. 調査参加者

中正由紀　根岸佳代　樋口晴美　平山美紀　保要美智子　小俣博子  
(以上、御茶ノ水女子大学考古学研究会)  
浅川喜恵　井富保仁　小沢三七子　小沢福子　小林光子　坂本慶子　鈴木節子　鈴木武士  
滝田武子　平嶋弘子　日向一子　日向登茂子　堀内さた子　堀内徳一　八巻久子　山本米子

### 7. 本調査の出土品、諸記録は長坂町教育委員会が保管している。

## 本文目次

序文	
例言	
目次	
第Ⅰ章 発掘調査による経緯	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	2
第Ⅲ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	5
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	7
第Ⅴ章 まとめ	11

## 挿図目次

本遺跡周辺の主な遺跡分布図	3~4
南新居西遺跡 1号住居址・2号住居址	13
南新居西遺跡 3号住居址・4号住居址	14
南新居西遺跡 5号住居址・6号住居址	15

## 図版目次

図版1……1号住出土遺物 (3) · 3号住-1 (3) · 3号住-2 (3)	
図版2……3号住-3 (2) · 4号住-1 (3) · 4号住-2 (3)	
図版3……4号住-3 (3) · 4号住-4 (3) · 4号住-5 (3) · 4号住-6 (3) · 4号住-7 (3)	
図版4……4号住-8 (3) · 4号住-9 (3) · 4号住-10 (3) · 4号住-11 (3)	
図版5……4号住-12 (2) · 4号住-13 (2) · 4号住-14 (2)	
図版6……4号住-15 (3) · 5号住出土遺物 (3)	
図版7……第2号住居址・第3号住居址	
図版8……第4号住居址・第5号住居址	
図版9……第6号住居址	

## 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

昭和54年より行われている県営圃場整備事業は長坂町においても毎年広い範囲において実施されている。

平成2年度は第Ⅲ工区（栗林地区）及び第Ⅳ工区（南新居地区）で実施されることになり長坂町教育委員会では平成元年度中に地中レーダー探査及び試掘調査を行ったところ第Ⅲ工区では埋蔵文化財包蔵の可能性は低いという結論が得られたが、第Ⅳ工区においては遺構・遺物ともに検出された。このため山梨県教育庁文化課、県北土地改良事務所と協議を行い本格調査を実施するはこびとなった。

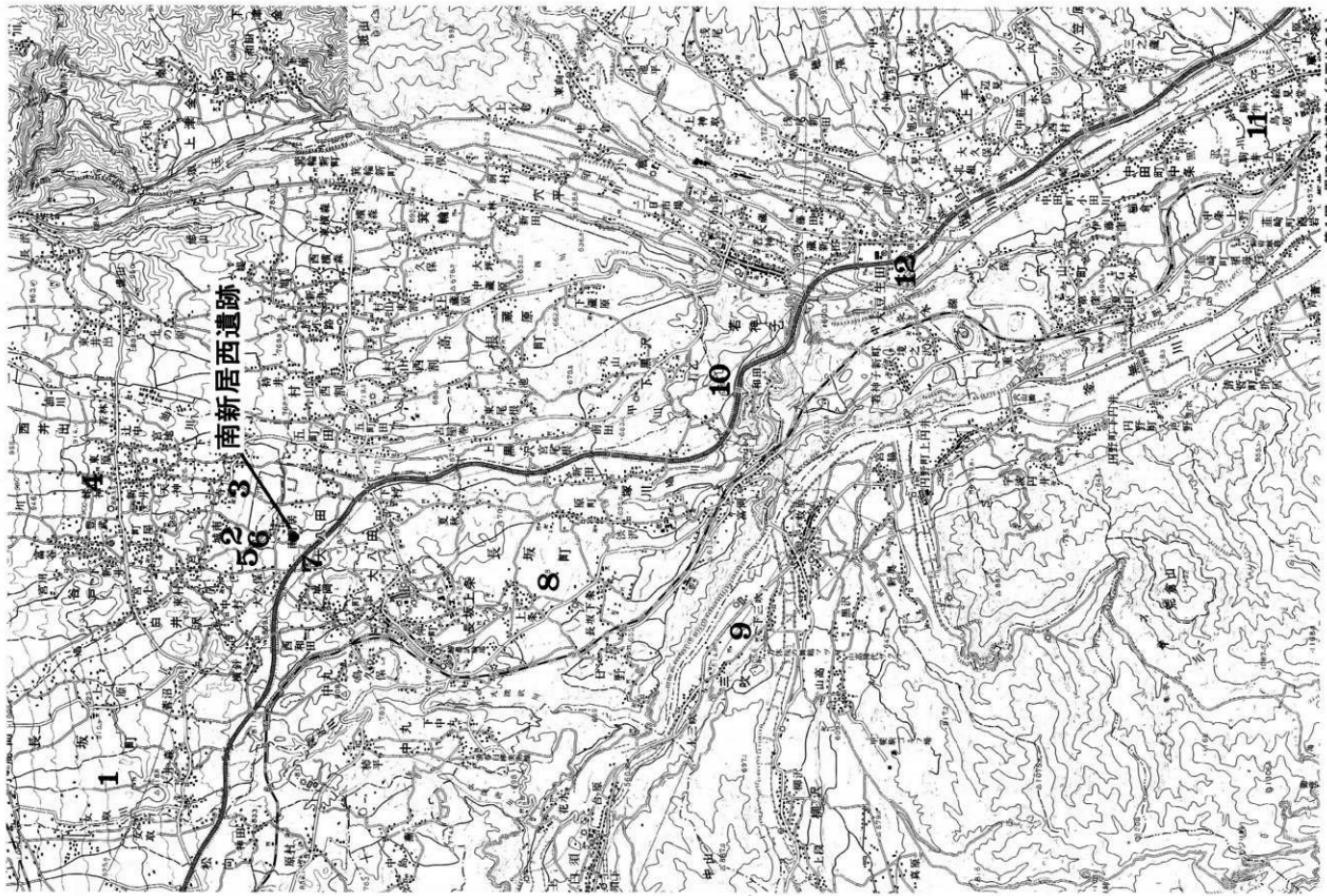
発掘調査は長坂町教育委員会があたることとし、文化庁より補助金を、山梨県農務部より負担金を受けて実施することとなった。

調査は平成2年6月11日より開始し、9月14日に現場作業を終了し、平成3年3月30日にすべての作業を終了した。

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

調査はトレントによって遺跡の範囲確認を行い、調査区を遺構・遺物が確認された圃場整備予定地の中央を南北に流れる用水路と西衣川の間の地点に設定した。遺構の確認された範囲は比較的南北に長く東西には幅が狭い、つまり集落としては広がりがなく規模の大きなものではなかったであろうと考えられる。そして、重機によって表土を除去した後10のグリッドを設定し、鋤籠によって遺構確認を行い遺構内部の調査を行い、その後に一括して写真測量によって遺構の図化を行った。

なお、本遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地の南新居西遺跡の範囲外であり本来の遺跡範囲内には遺跡は確認できなかった。しかし、ここでの名称は周知の埋蔵文化財包蔵地の南新居西遺跡とした。



第1図 周辺の主な道路（5万分の1）

### 第Ⅲ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

南新居西遺跡は、八ヶ岳南麓の標高約740m程の河川によって侵食された南北に細長い舌状台地上に位置している。しかし、侵食の程度は低く台地と河川の比高差は1~5mであり、極端な地形の起伏は見られない上に周辺の南アルプスなどの高い山々も南側にはあまり迫っておらず日照時間が長い。また、この舌状台地を乗せている人気な台地は、今から約100万年前の第Ⅳ期中頃の八ヶ岳の山体崩壊期に発生した蘿崎泥流と呼ばれる泥流によってできたものである。この泥流は、大規模なもので最大層厚は200m以上あり甲府盆地の南縁部にまで達している。しかし、現在では河川の侵食等により八ヶ岳南麓を除けば甲府盆地南縁の骨根丘陵の一部と、西縁の之瀬台地及び蘿崎市の竜岡付近でわずかに見られるだけである。また、八ヶ岳南麓付近でも西側は富士川（釜無川）で、東側は塩川と須永川で侵食されていて双方とも切り立った岩壁を残している。特に西側の富士川沿いでは長野県境付近から蘿崎市までの20数kmにわたって岩壁が続いており七里岩と呼ばれている。そして、この富士川沿いにフォッサマグナの西縁と静岡糸魚川構造線がとおっていて、その南西側には播磨山脈の南アルプス（赤石山脈）が、北東側には火山である八ヶ岳が位置している。

また、この近辺の河川は標高900m~1100m付近に点在する八ヶ岳の伏流水の湧水群（八ヶ岳南麓高原湧水群）を水源にしているため年間を通して水量が安定している。

そして、土地に極端な起伏がなく平坦で水が安定供給され日照時間が長いという、人間が生活するのに好条件が揃ったこの様な自然環境のためか、この周辺には縄文時代から中世に至るまでの数多くの遺跡がある。

しかし、その数多くの遺跡も時期を見ると極端な偏りがある。長坂町内には現在160箇所以上の周知された遺跡があるが、今までに調査された遺跡のそのほとんどが縄文時代中期と後期、それに平安時代と中世の遺跡である。この原因は長坂町で過去に調査された痕跡は圃場整備事業に伴うものがほとんどで、河川とは比較的高低差のない、地形がほぼ同様な立地であったためである。つまり、遺跡の時期によって立地がかなり限定されると言えるであろう。これら以外の立地、例えば独立丘陵などには弥生時代後期から古墳時代等の遺跡も存在しているであろう。しかし、上記のものと比較すると少量である。また、奈良時代のものは、遺構・遺物とともに長坂町周辺の蘿崎泥流の上ではまったく発見されておらず、該期の遺跡は須永町や蘿崎市方面の蘿崎泥流から降りた地域で検出されている。これらの偏りの原因については、縄文時代から弥生時代は気候の変化や食糧確保といった自然環境の条件によるものが主なものである可能性が高く、古墳時代以降については上記の理由に加えて大和朝廷による公権力の介在も考えられる。それについては特に統日本紀に見られる703年（盛龜2年）に甲斐国他六ヶ国の大連合による武藏國へ移住させ高麗郡をおいた記事と八ヶ岳南麓から集落が消滅した時期とが時間的な一致をみる。また、八ヶ岳南麓は真衣野牧・柏原牧・穂坂牧の三官牧と関連して計画的に

開発されたと考える説もあり、それが集落の急激な増加の理由である可能性がある。

それでは次に具体的に南新居西遺跡周辺の主な遺跡の概要を述べる。

1は、広域農道の建設に伴い県埋蔵文化財センターにより調査された中込遺跡である。ここでは、縄文時代草創期の爪形文土器や早期末の絡状体圧痕文土器など県内では出土例の少ない貴重な遺物が検出された。2は、県営圃場整備事業に伴い県教育委員会によって調査され、現在ではその一部が国の史跡に指定されている金生遺跡である。ここでは著名な縄文時代後・晩期の配石遺構群のほかに中世の遺構・遺物が検出されている。これは後述する深草館跡の外郭部であると考えられ、遺構は地下式壙、柱穴群、土壙等が検出され、遺物は陶磁器類や内耳土器等が出土した。3は、同じく県営圃場整備事業に伴い県教育委員会によって調査された寺所遺跡である。主に平安時代の集落が検出されているが、弥生時代の古い段階の土器を伴った土壙も検出されている。4は、東経神遺跡で県営圃場整備事業に伴い大泉村教育委員会によって調査された。ここでは平安時代の集落が検出されたが、出土遺物の中に『安曇』の墨書きを持つものがあり、信濃の安曇地方や安曇氏との関連が注目される。5は、県営圃場整備事業に伴い長坂町教育委員会が調査を行った大八田・原田遺跡である。ここでも平安時代の集落を検出した。6は、長坂町の指定史跡である深草館跡である。12世紀中頃の築造と伝えられるが定かではない。大泉村地内にある北東の外郭部を金生遺跡B区として調査した際には15世紀から17世紀にかけての遺構・遺物が検出された。館跡自体は土壙と空堀それに自然河川を利用した壠に囲まれている。内部はさらに土壙によって北郭・南郭に区切られている。土壙の高さは郭の中から見て約1.5m程、西側の水田から見ると約3m程あり内部は平坦に造成されている。内部の主郭は調査されたことがないので遺構についての詳細は不明である。7は、長坂町教育委員会が県営圃場整備事業に伴い数次にわたって調査を実施した小和田館跡である。14世紀から17世紀にかけての遺物が検出され、また多くの遺構が検出されていて北東部では深草館跡と同じく外郭部と思われる遺構群が検出された。館跡本体は薬研堀と川に囲まれていて柱穴群、溝、地下式壙等の遺構が検出され、遺物は外郭部において古瀬戸の四耳壺に括り納された3000枚を含む合計約6000枚の備蓄錢が出土した。特に四耳壺内のものは錢の孔に通して束ねた薬紐が良好な状態で遺存していて、いわゆる「差し」の状態で出土した。錢の種類は永楽通宝・皇宗通宝・洪武通宝・開元通宝等の渡来錢である。また、外郭部の竪穴状遺構の内部から銅製の椀蓋が出土した。土器等は明の染付や国内産の陶磁器類、それに内耳土器等の土師質土器も出土した。8は、長坂町指定史跡である長閑屋敷跡である。「甲斐国史」によると武田氏の家臣で逆臣とされている長坂長閑斎の屋敷跡とされている。現状は台地上の山林で、規模は南北が約90m、東西が約60mで東側が台地の地形に沿って膨らんでいる。周囲は高さ約1~2m程の土塁によつて囲まれている。そして、北側を除いた部分には幅約3m深さ約1~1.5m程の空堀が配されている。虎口は南側土塁の中央やや東寄りにあり堀は十櫓で渡る。また、虎口付近の空堀の南側にはさらに土塁が築かれ二重土塁となっている。土塁の内部は平坦であるが、未調査のため遺

構は不明である。この史跡の周辺は丘陵上の平坦部から南向きの緩斜面へと続いて多くの埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高い。9は、県営圃場整備事業に伴い武川村教育委員会で調査を実施した宮間田遺跡である。ここは三官牧のひとつ真衣野牧の比定地に近く、実際に『牧』の文字が墨書きされた土師器坏が出土している。このため真衣野牧との関連が指摘されている。10は、駿北中核工業団地の造成に伴い高根町教育委員会と須玉町教育委員会によって調査された湯沢遺跡と大小久保遺跡である。ここでは集落内に堅穴住居址とともに構列や多くの掘立て柱建物址が検出されている。特に掘立て柱建物址が多く検出されている状況は役所としての性格をもつ可能性があり、柏前牧の牧監との関連が指摘されている。11は、韮崎市遺跡調査会が市立北東小学校の建設に伴い調査した宮の前遺跡である。ここでは奈良・平安時代の大集落が検出され、それに伴い奈良三彩や円面鏡等の稀に見る貴重な遺物の検出もさることながら弥生時代と平安時代の水田遺構が発見された。特に弥生時代のものは前期中葉、紀元前2世紀頃のものと推定されている。これは東日本で発見された水田遺構のなかでも最も古いもののひとつである。12は、中央高速道路須玉インターチェンジの建設に伴い山梨県教育委員会により調査された大豆生田遺跡である。ここでは北巨摩地方においては珍しく奈良時代の集落が検出されている。ここは、前述した韮崎泥流が塩川、須玉川によって侵食されてしまった地域に相当する。

以上、八ヶ岳南麓を中心とした主な遺跡を概観した。これらのもの以外にも調査済みのもの、未調査のもの、周知されたもの、未周知のものと数多くの遺跡が存在している。これらの遺跡を開発の波から保護し後世へ伝えてゆくことは今を生きる我々に課された大きな責務であるといえよう。

## 第IV章 検出された遺構と遺物

南新居西遺跡では平安時代の集落が検出された。以下でその、概要について述べる

### 第1号住居址

本遺跡調査区の中でも最も北側に位置している。・辺が約4m程のIF方形を呈するが、土壌と後世の耕作によりかなり擾乱されており遺構の遺存状態は不良であった。壁は最大でも10m程しか遺存していなかった。床は固く踏み締められていた。窓は東壁の南コーナー付近に設置されていたが、ほとんど遺存していなかった。

遺物は図ができるものは1点のみであった。土師器の甕で口縁から胴部上位にかけて全体の3分の1程が遺存していた。現存器高は7.6cm、復元口径は25.6cmを計る。胎土は精製されており焼成も良好で堅緻であった。色調はやや赤みがかった褐色である。口縁部はナデで、胴部は外面は縦方向の粗いハケで内面は細かい横方向のハケで調整されている。

#### 第2号住居址

調査区の北寄り西側で検出された。4m四方の正方形で、その平面形をよく残しているが、後世の耕作によって遺構の上部のほとんどが削平されてしまっている。壁はやはり、10m程しか遺存していない。窓は東壁の中火やや南寄りに位置していたが、ほとんど遺存していなかつた。

- 遺物は、図示不可能な小破片が数点出土したのみである。

#### 第3号住居址

調査区の北寄り東側で検出された。水田と水田の境に位置していたため、水田造成時に南北分がそっくり削平されてしまっている。窓も東壁の南コーナー寄りにあったと推定されるため、火床部のわずかな痕跡を残しただけで、削平されていた。一方北側は良好に遺存しており北壁は3.7mを計り高さも70m程あった。

図示し得た出土遺物は3点ある。1は土師器の壺で口縁部から体部にかけてが約1/4、底部が約1/2程遺存している。器高は4.5cm、復元口径は15.2cm、底径は6.3cmを計る。輪轂によって成形されている。胎土はよく精製されていて焼成も良好である。色調は暗褐色を呈している。2は灰釉陶器の小壺蓋で胴部下半が約1/2、底部が約3/4程遺存しており、現存器高8.7cm、底径は6.7cmを計る。胎土はよく精製され焼成も良好で堅緻である。色調は明灰白色を呈している。釉薬は胴部上位を中心ハケ塗りにより施釉されている。また、それ以外の部分も外面についてはほぼ全面に、内面については底部に自然釉が付着している。3は土師器の壺で口縁部から胴部上半にかけて殆どが遺存している。胎土には黒雲母と細礫を少量含んでいる。焼成は良好で色調は暗褐色を呈しているが外面は2次焼成を受けているためか黒化している。復元口径は26cmである。

#### 第4号住居址

調査区のほぼ中央やや北寄りで検出された。1辺が約5.2mで本遺跡の中で最大の規模で、壁高も約70cmを計り、全体的に良好な遺存状態であった。壁溝は窓部分を除きほぼ全周しており床面も堅緻であった。住居址の北壁の約50cm程外側に30cm程の深さの2本のビットが3m程の間隔で検出された。このビットはその覆土等の検出状況から本住居址に伴うものと考えられ、いわゆる屋外柱穴ではないかと考えられる。窓は東壁の南コーナー付近に設けられていた。

遺物も遺構自体の遺存状態が良好なため本遺跡の遺構のなかでは最も多く出土した。1は土師器壺で口縁から体部にかけてが約1/4、底部が約1/2程遺存していた。輪轂によって成形され、体部下半から底部にかけて手持ちによるヘラ削りによって調整されている。胎土は精製されていて若干小石を含んでいる。焼成は良好で堅緻である。色調は外面がやや赤みがかった暗褐色

色を内面が暗褐色を呈している。器高は4.1cm、復元口径は11.1cm底径は4.2cmを計る。2は同じく土師器の杯で口縁から体部にかけて約4分、底部が約4分程遺存している。輪轂によって成型され体部下半から底部にかけて手持ちのヘラ削りによって調整されている。胎土は非常によく精製され緻密で、堅緻に焼成されている。色調は内外面ともにやや赤みがかった明るい褐色を呈している。器高は4.1cm、復元口径は10.6cm、底径は4.2cmを計る。3は土師器の皿で口縁から体部上半にかけて約4分程失っているがその他は完存している。輪轂によって成型され体部下端から底部にかけて手持ちのヘラ削りにより調整されている。胎土はよく精製され緻密である。焼成は良好で堅緻である。色調は外面はやや赤みがかった暗褐色を、内面は暗褐色を呈している。器高は2.4cm、口径は12.4cm、底径は5.8cmを計る。4も土師器の皿で口縁から体部にかけてを約4分程欠失している。輪轂によって成型され体部下半から底部にかけては手持ちのヘラ削りにより調整されている。胎土は若干小石を含むものよく精製されている。焼成も良好で堅緻である。色調は内外面ともやや赤みがかった明褐色を呈している。器高は2.9cm、口径は12.3cm、底径3.7cmを計る。5も土師器の皿で口縁部の一部を欠失するのみで他は完存している。輪轂成型で体部下端から底部にかけて手持ちのヘラ削りによって調整されている。胎土はよく精製されていて焼成も良好である。色調は内外面とも暗褐色を呈するが、外面は底部を中心に2次焼成を受け黒化している。器高は2.4cm、口径は11.7cm、底径4.3cmを計る。6も土師器の皿で口縁から体部にかけて約4分強遺存し底部については完存している。輪轂により成型されており体部下半から底部にかけて手持ちヘラ削りにより調整されている。胎土はよく精製された緻密なもので、焼成も良好で堅緻に仕上がっている。色調は内外面ともに褐色を呈しているが、外側の底部付近は2次焼成のためか黒化している。また、外面体部には「鳥」の文字に似た墨書きが施されているが、意味は判然としない。法量は器高2.1cm、復元口径12.6cm、底径5.4cmを計る。7はやはり土師器の皿で口縁から体部にかけてが約4分、程遺存し底部は完存している。輪轂成型で体部下半は手持ちヘラ削りによって調整がなされている。また、内面体部中程に破をもつ。胎土は精製されているが、焼成がやや軟質である。色調はやや赤みがかった明褐色である。法量は器高が2.8cm、口径が13.2cm、底径が5.0cmを計る。8は土師器の杯で口縁部から体部が約4分程遺存している。輪轂によって成型されていて体部は手持ちヘラ削りで調整されている。胎土は良く精製されていて緻密で焼成も良好で堅緻である。色調は内外面とも明褐色を呈するが外面はやや赤みがかれている。なお体部外面に6の皿と同じ墨書きが施されている。器高は5.6cm、復元口径は11.4cmを計る。9は灰釉陶器の高台付きの皿で、口縁から体部にかけてが約4分、底部が約4分程遺存している。高台は付け高台である。胎土はよく精製され焼成も良好である。施釉は手持ちの浸けかけであるが、釉薬は白色を呈しあまり良質のものとはいえない。色調は明灰色である。法量は器高3.5cm、復元口径15.4cm、底径が6.8cmを計る。

10は灰釉陶器の小型高台付き碗である。全体の約4分弱が遺存している。高台は付け高台で胎土・焼成とともにすこぶる良好である。施釉は手持ちの浸けかけで釉薬は厚く施釉されているところ

では緑色がかかる見える良質のものである。色調は暗灰色である。法量は器高4.0cm、復元口径10.8cm、底径5.3cmを計る。11は灰釉陶器の長頸瓶の口縁から頸部にかけてで、焼成遺存している。胎土、焼成ともに良好である。色調は暗灰色である。復元口径は12.6cmである。12は上師器の甕で口縁部から体部上位の部分にかけて約半周焼成遺存している。胎土はあまり精製されておらず、小石や黒雲母を含む。焼成は良好である。口縁部はナデにより胴部は外面が縦方向の内面が横方向のハケによって調整されている。色調は黒褐色土を呈し、特に外面は火を受けていたために黒化が激しい。現存器高は8.2cm、復元口径は13.4cmを計る。13も土師器の甕である。口縁部から胴部上位にかけてが3程度焼成遺存するにすぎない。胎土は精製されており緻密で、堅硬に焼成されている。胴部外面はハケにより他の部分はナデによって調整されている。色調は本来はやや赤みがかった明褐色であるが、煮沸形態の土器の宿命で2次焼成を受け黒化している部分が多い。現存器高は9.5cm復元口径は22.8cmを計る。14も土師器の甕である。胴部下端から底部にかけてが焼成遺存している。胎土は精製されているが、若干の黒雲母と小石を含む。焼成は良好である。口縁部は内外面ともナデにより、外面は粗い縦方向の、内面は細かい横方向のハケによって調整されている。色調はやや赤みがかった褐色である。現存器高は13.8cm、復元口径は28.0cmを計る。15も土師器の甕である。胴部下端から底部にかけてが焼成遺存している。胎土はあまり精製されているとはいはず小石や、黒雲母を含む。焼成は良好であるが2次焼成のためと思われる器面の荒れが目立つ。調整は外面にわずかに縦方向のハケを残す。色調は内外面とも暗褐色を呈し、特に内面は黒化が激しい。これは2次焼成のためと思われる。現存器高は5.0cm、底径は6.5cmを計る。

#### 第5号住居址

調査区の南半東寄りで検出された。平面形は1辺が約5.5cm程の正方形である。壁高も約50cmと遺存状態も良好であった。床面は竈周辺は踏み固められていたがその他の部分は比較的軟弱であった。本住居址も北東コーナー付近の住居址外に1本のピットを検出した。このピットも住居址に伴うものと考えられよう。竈は東壁のほぼ中央に設置されていた。

出土遺物は、遺構の良好な遺存状況と比較すると少なめで、図示し得たものは1点のみである。土師器の小型甕で、口縁部から胴部中位にかけて約半周を欠く。胎土は非常に良く精製され、焼成も良好である。色調は本来は明褐色を呈していたと思われるが、2次焼成による黒化が見られ、さらにそのためと思われる器面の剥落が胴部外面に見られる。輪轆によって成型され底部には糸切り痕を残し、さらに回転台から切り離した後に置いた場所の圧痕が残されている。器高7.7cm、口径10.3cm、底径5.8cmを計る。

#### 第6号住居址

調査区の最も南に位置し、遺構の大部分は調査区外に存在する。調査区内の部分は東壁周辺

のみである。東壁は3.4cmを計る。東側の壁であるにもかかわらず竈は検出されず、焼土等も見られなかった。遺構内覆土には礫が多く混入しており床面も軟弱であった。

遺物もいざれも小破片で図示し得るものはなかった。

以上の様な状況からこの掘り込みは遺構としての性格を持たないものかもしれないが、コーナーが確認できその付近の状況から一応住居址として取り扱った。

## 第V章 まとめ

南新尼西遺跡では6軒の住居址が確認されたが、1・5号住の2軒の例外を除きいずれも耕作や水田造成のための擾乱により遺存状況は不良であった。特に調査区の北寄りでは水田の耕作面から遺構確認面までがわずかに30m程で、水田の耕作土を除去するとそこが遺構確認面であった。このような状況のため特に1・2号住はほとんど削平されてしまっていた。このため、遺物も多くは遺存していなかった。その中で遺構・遺物の特筆される部分について述べる。

### 1. 遺構について

4号住からは灰釉陶器をはじめとする多くの遺物が出土している。なかでも10として図示した灰釉陶器の小型の高台付きの碗は少しだけ遺存していないが、その釉薬はやや緑色がかった非常に優秀なものであった。他にも灰釉陶器の皿や図示しなかったが須恵器の大甕の破片が数点検出されており、他の住居址とは明らかに違い優秀な遺物が検出されている。また、この住居址は規模も1辺が約5.2mと本遺跡のなかで最大で遺構・遺物の両面から見て明らかに他の住居址とは差がある。このことからこの住居址は本遺跡の集落のなかでも特別の位置にあったと考えられる。その特別の位置とはこの住居の住人が集落の何らかの形での指導的な立場にあつたものではないかと考えられる。

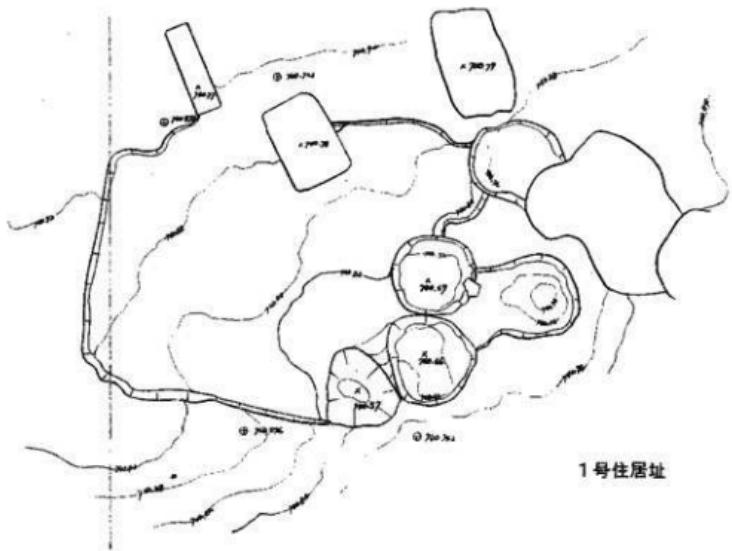
また、屋外柱穴が注目される。これはこの遺跡周辺において該期の住居址内からの柱穴の検出例が少ないと併せて考えると興味深いものがある。この柱穴自体は深さが約30m程で住居址自体の掘り込みよりも浅いものである。この点から考えると、住居址本体がある程度削平されてしまうと、遺存状態によっては住居址自体の床面は遺存しても屋外柱穴は遺存しないといったことも有り得る。このことから今まであまり検出例の多くなかった屋外柱穴であるが、もっと普遍的に集落内に存在していた可能性も指摘できよう。

5号住居址も本遺跡の中で遺存状態が良好で、住居址外の柱穴も1本確認されている。ここに柱穴は住居址の北東のコーナーに直角25m程のものが1本のみ検出された。また、住居址の床面の状況であるが、竈周辺は固く踏み締められていたもののそれ以外の部分においては軟弱であった。これは、長坂町周辺の平安時代以降の住居址に普遍的に言えることであろう。これは、古墳時代五領期位までの時期の住居址は炉址を中心として床面のかなり広い範囲が踏み固

められているのと比較して対称的である。これは固く締まった床は床面を地床として利用しているのに対し、軟弱な床は床面に板材などを張り利用していたであろう事は既によく知られたことである。では、5号住の竈周辺の部分が固く踏み縮められていたのはなぜであろうか。五個階位までの住居址において炉の周辺が住居内における生活の中心としてその周辺が特に踏み縮められていたのと同じく、やはり平安時代においても竈が住居内の活動の中心的な位置であったであろう。しかし、火の利用という竈の機能を考えるとその周辺に可燃物である板材を張るということは危険であり、また竈内からの灰の排除の便からも竈周辺は地床として利用したのであろう。

## 2. 遺物について

出土土器はその大部分がいわゆる「甲斐型」のタイプの土器であった。これは以前に長坂町内で調査された平安時代の遺跡の例から見ると少々変わっている。つまり、今までに調査された遺跡の出土土器にはいわゆる「内黒」タイプの土器がかなり多く認められていて、遺構によつては「甲斐型」の土器がほとんど認められない位でなのである。従来、この「内黒」の卓越と「逆転現象」は主に諏訪地方との人的・物的交流を証明するものとして既に知られていた。しかし、この南新居西遺跡においては「内黒」土器の検出が小破片に至るまでほとんどなく「甲斐型」の土器が大部分を占めている。もちろん、すべての遺跡において「逆転現象」が起きている遺構が必ずあるとは考えられないが、逆転をする遺構のある遺跡とない遺跡の差というものは何なのであろうか。今までの検出例から時期的な差や遺跡立地による差というものは認めがたく、あくまでもランダムに存在するのである。この差は集落毎に諏訪地方との交流のある集落、ない集落という違いがあり、この地域が諏訪地方と一緒に交流しているのではないとう言うことではないだろうか。つまり、従来三官牧との関連で計画的に開発されたとされている八ヶ岳南麓であるが、その集落毎には独立した経営方針に基づき独自の運営を行っていたものと考えられる。それにより、諏訪地方との交流がある集落、ない集落が発生していて、「内黒」タイプの土器を持つ集落、持たない集落が発生した可能性があるものと思われる。つまり、長坂町周辺の集落と諏訪地方との交流は地域ぐるみのものではなく、少なくとも甲斐国側においては単位集落毎の交流であったと考えられる。

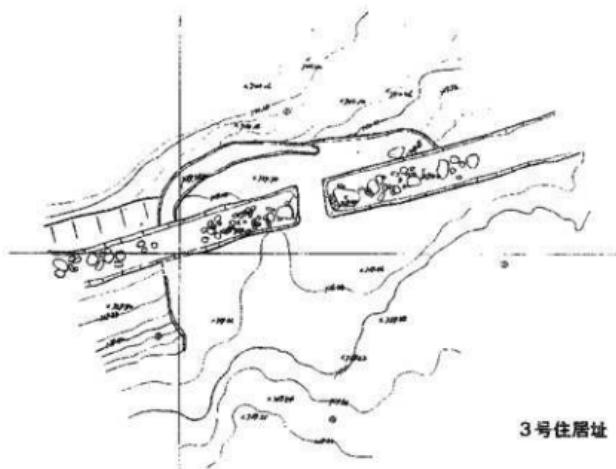


1号住居址

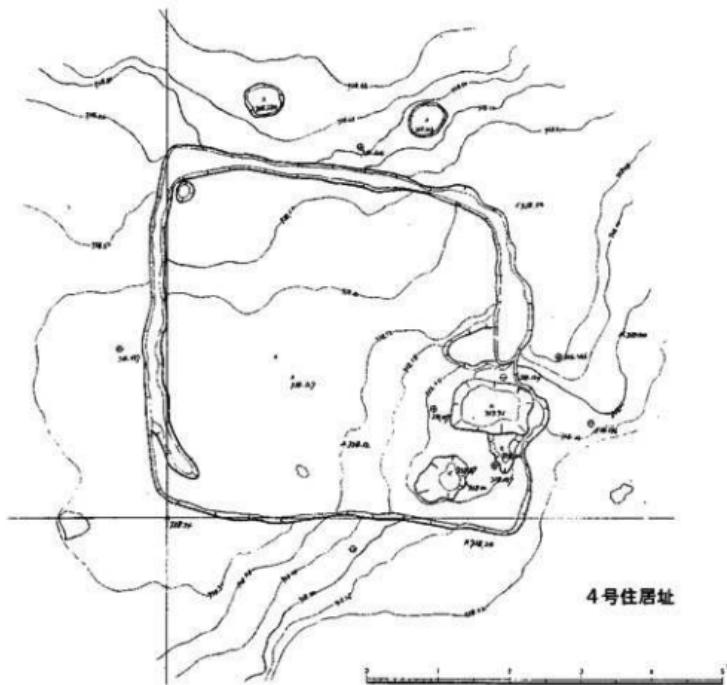


2号住居址

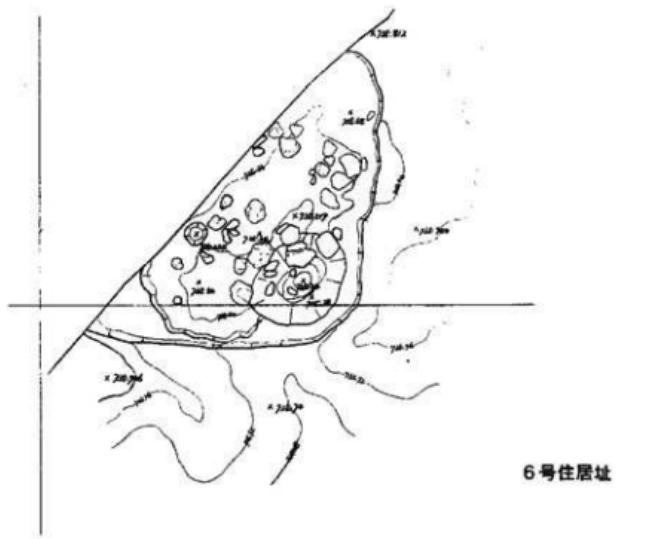




3号住居址



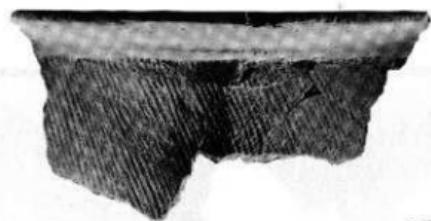
4号住居址



0 1 2 3 4 5"



# 図版



1号住出土遺物 (3/4)



3号住-1 (3/4)



3号住-2 (3/4)



3号住-3 (3/4)



4号住-1 (3/4)



4号住-2 (3/4)



4号住-3 (Y1)



4号住-4 (Y1)



4号住-5 (Y1)



4号住-6 (Y1)



4号住-7 (Y1)



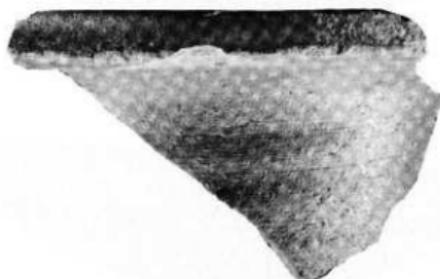
4号住-8 (3/4)



4号住-9 (3/4)



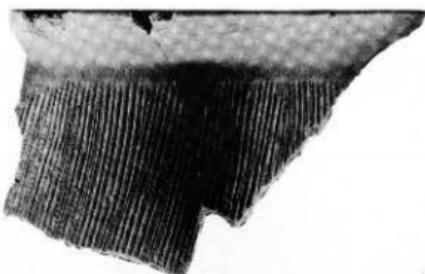
4号住-10 (3/4)



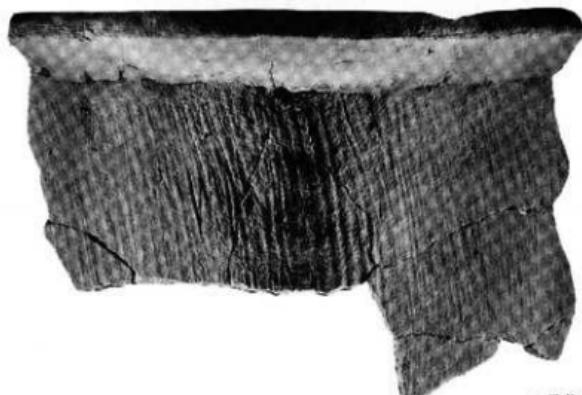
4号住-11 (3/4)



4号住-12 (1/2)



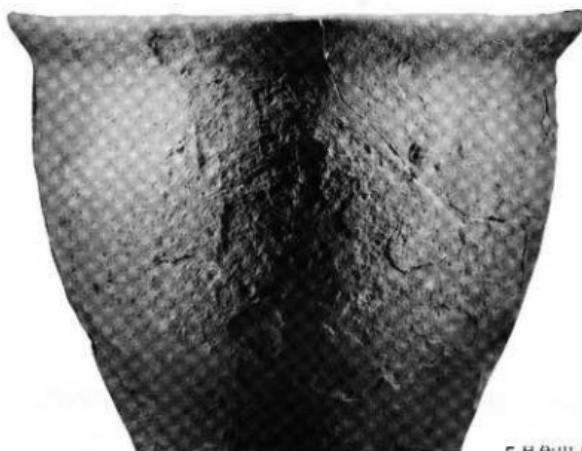
4号住-13 (1/2)



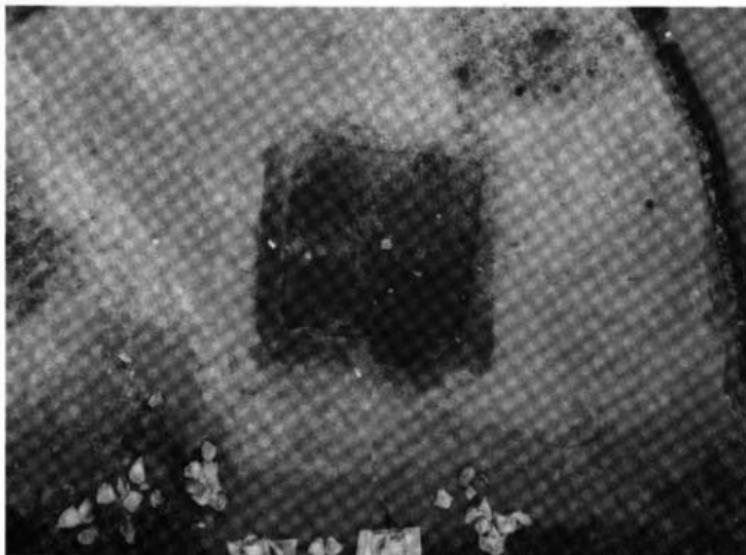
4号住-14 (1/2)



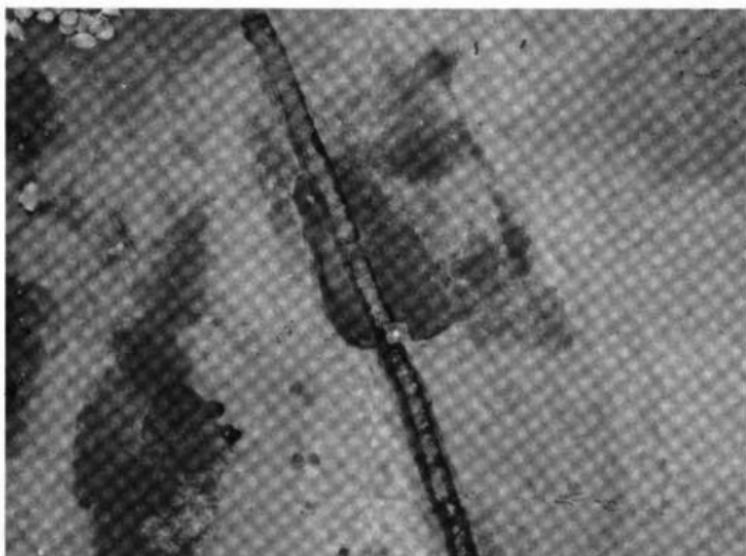
4號住-15 (3)



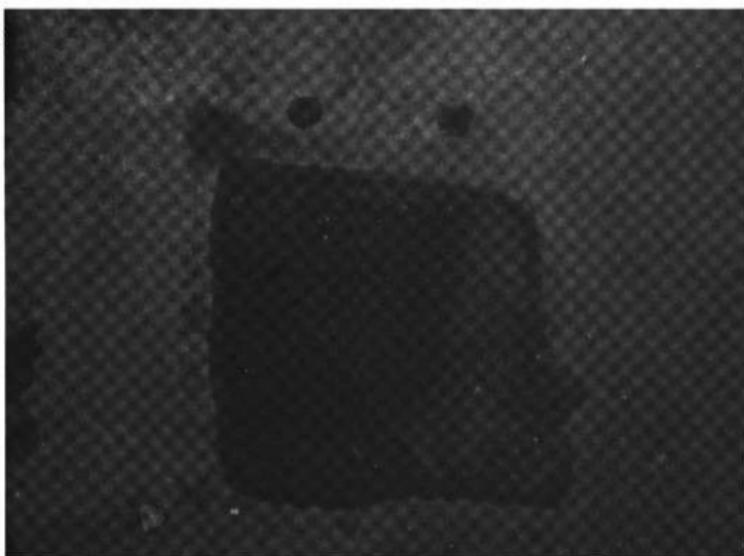
5號住出土遺物 (3)



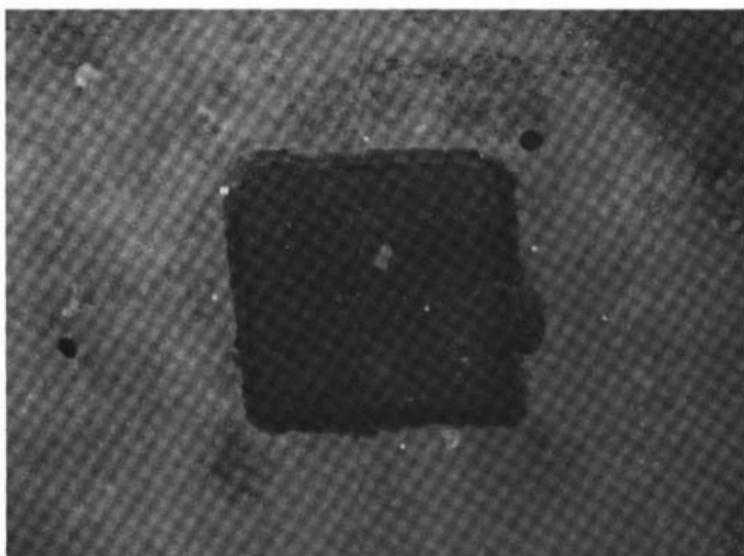
第2号住居址



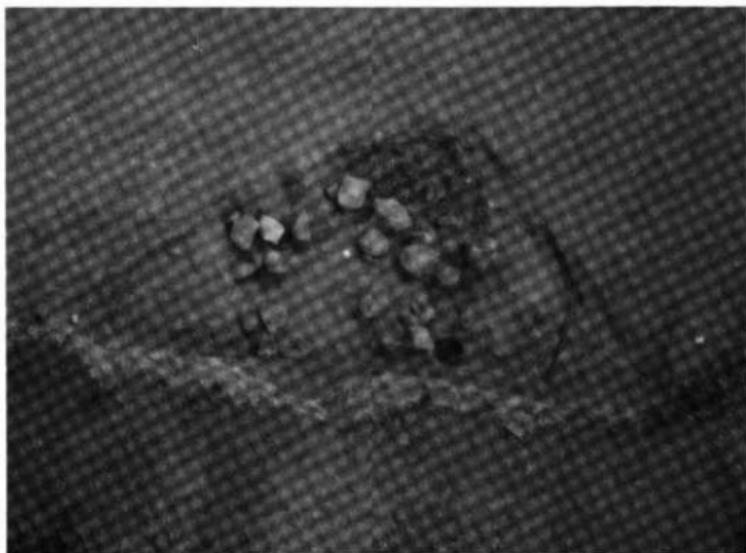
第3号住居址



第4号住居址



第5号住居址



第6号住居址

---

**南新居西遺跡報告書**

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行 長坂町教育委員会

山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19

TEL 0551-32-2111

印刷 島北印刷株式会社

山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313

TEL 0551-32-3245

---

